

浄土

二月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別扱)
昭和四十年一月二十五日 印刷 昭和四十六



法然上人鑽仰会



舞 見 御 中 寒

大本山 善光寺大本願

法主 一条 智光

鷹司 誓玉

執事 早川 利雄

浄土宗宗務支所

支所長 新谷 寛 応

浄土宗宗議会副議長

伊原 文雄

柳井市柳井津 瑞相寺

原口 徳正

東京新宿二丁目 正受院

表紙の解説

伎芸天

秋篠寺蔵

み仏にもいろいろあるが、わがつたなき芸が、他人から見られても恥ずかしくないものでありたい、なにとぞこの願いを納受し給えと祈るべきみ仏が上代人の胸中にも去来したのであるうか。世にこれを伎芸(ぎげい)天と呼んでいる。温和なまなざしと整ったお顔のどこかに毅然とした姿を現わしているが、「あまえるな、芸はあまえては完成しない。それでも一芸に秀でたいと考えているのか。」と叱咤しているようにも見受けられる。弱い人間は確かにあまえてみたくなる。誰かに、世間に。しかし、他人も世間も冷い。うちひしがれた人間がこのみ仏の温顔にふれ、自分のすべてを任せあまえようとすれば、それをねつけて、自分に強くなることを教えてくれる。その時ひとは自分の愚かな行為に気がつき、自分は一人ぼっちではない。このみ仏がいつでも自分の背後から温く見守ってくれている、という自信を湧き起こさせてくれる。そういうみ仏を生み出してくれた上代人の心豊かさにほのぼのしたものを感じとることができよう。

川田 順

寧楽へいざ伎芸天女のおんまみに
ながめあこがれ生き死なんかも

(石上善応)

内も外もありのままにてかざる心のなきを、
至誠心となづくるにてこそ候めれ。

法然上人御法語



— 目 次 —

表 紙 衿羯羅童子 浄瑠璃寺蔵

随 想	内野熊一郎・真野竜海・堤古都子	(2)
涅槃の世界としての浄土		(4)
座 談 会 現代社会の動きと宗教の役割(2)		(8)
浄土信仰問答 タタリはあるか	藤 井 実 応	(12)
仏のお慈悲	金 子 真 補	(24)
— . — . — . — . — . —		
近世文名録 鈴木積善氏	高 橋 良 和	(18)
東南アジア旅行記	佐 藤 行 信	(20)
創価学会手引 公明党二つの解説書		(15)
浄土風土記 天照山 光明寺		(16)
ご法語をいただく		(7)
喜劇・悲劇		(32)
会員だより		(27)
編集後記		(33)
— . — . — . — . — . —		
日本浄土教物語 浄土教の発達	鈴 木 成 元	(28)

の怠慢であつた。

キャンベラの国立大学教授柳存仁氏から、その多年研鑽による「墨經箋疑上卷」等の惠送を受けたのも、こんな一日であつた。墨經といへば、墨子学派の學術用語定義篇とでもいへようか。晋魯勝以来、難解脫詁のテキストである。若い学生の頃、私の墨子研究過程にも、これにぶつかつて、惨々苦しんだ部分である。先人数十種類の研究やテキストを集較しての、柳氏のこの解明は、それだけに、私にも朗報であり、好参考資料である。思へば、南溟九万里、空や海越えて、飛送せられた鴻恩高著、正に世紀の一楽である。莊子のおとしり鵬ならずとも、凶南を憶い、南翔して謝意を述べようとするであらう。歳末、安息樂日の一風情である。

先日還曆の会で、三才の幼女が、身の丈ほどの花束を贈呈してくれた。可憐な名は「な南ちゃん」。莊子の大鵬凶南の故事かららしい。雄飛大志の烈女の芽生えか。賀状に罩めて秘めおく識の密かなる祈り。奇しくも、日を同じうした南溟の一瞬。安息樂日の一瞬は、夕べに刻みこまれてゆく。

は、なんのPRもしないが、彼等は、三々五々打ち連れて、一つのかん袋を手にして寺を巡る。寺では、脇陣に、大きな涅槃図の掛軸をかけ、莊嚴を整え、すぐ傍に、あられの入った鑑を出しておく。鑑の中には、湯呑茶碗が一つ無難作に入っているだけである。彼等は、じつと、釈尊の涅槃と、まわりのいろいろな弟子、動物の姿を見つめている。そして、おもむろに、あられを、茶碗に一杯ずつ、めいめいの袋に入れて帰る。これがおしやかさまのはなくそというのである。一人で何杯もというがめついのもないし、一人一杯とも書いてもないし、寺の人もついていない。まことに、のんびりしたものである。

今のように刺激の強くない時代だったからかも知れないが、住職の一言の説明もないのに、ふしぎに、その事柄が、昨日今日のように思い出に浮ぶ。今日、その行事は続いているかどうか知らない。あられば、正月の供餅を住職が切り、干し、いったものである。

子供達は、又、この次は四月花祭りの甘茶を、一升瓶を下げてもらいにくるんだ等、語りつつ、次の寺へ廻っていく。

さえくれる。樹令六、七十年（いやもつとかもしれない）もたったであらうか、春夏秋冬と共に芽をつけ葉を茂らせ黄葉し落ちるといふことを、何十回と繰り返してきたことであらう。

時にバスの中で昔の教え子に会うことがある。みちがえる程に大きくなった子が、昔の思出話や現在の心境などを語ってくれると、うれいような誇らしい気持になる。そしてそんな時こそ自分というものにたちかえる。教え子の成長を願って日夜努力している私が去っていった教え子の姿に時の流れを感じるのである。四季の移り変りと共に自然の営みを続ける樺の一本々々に、盈々と続く時の流れを感じ、それが私の年々の生活のように思え、樺と一にする自分を見出してほっとするのである。

樺並木もさることながら、最近では武蔵野の面影も残さぬ程に切り開かれていくのを感じる。尚更過去から未来へ続く時の流れを感じるが、寒空に葉一つ無い枝が突き抜けているのを見ながら、毎日を明かるく生きよう。

妄息楽日の風情

内野熊一郎

(東京教育大学教授・文庫)

歳末の一両日には、書物や書信の塵をはらったり、整理したりする、終始伸びきった安息ならぬ妄息の楽日がある。少年の故山を懐い、青年の旅路をふり返えり、満鮮・中華の山川風物詩の中に、新旧誰彼の微笑や哀歎を思い浮べ、古人近友に心交愛語するなど、一瞬にして千山万里を飛仙し、古今を縦横に見聞披覽するのは、こんな時である。賀状に「又一年」の心魂を覃め、電話に驚かされて書債を支払うなども、こんな日である。ふと窓外に眼を転ずると、視線の焦点に結ばれたものは、おや、もう白梅のつぶらな蕾なのであった。そしてその根もとの埋め鉢には、可憐楚々とした雪割り草が蕾の首をさし伸べ、福寿草が俵のような蕾芽をもたげ、春蘭の芽が寸余にニヨキニヨキと立っている。若い生命の芽の捷ちどきであり、権限であり、自然力である。気づかなかったのは、歳末、人間

おしゃかさまのはなくそ

真野龍海

(大正大学助教授)

わたくしは、幼少のころ、丹後の宮津で育った。その寺は、天の橋立を対岸に見る小山の上にあった。広い参道は、なだらかなスロップで下の町並へのびていた。山続きに、いくつかの寺々があり、それらは、表の道以外に、山道や、抜け道でも連絡していた。従って、一帯の山は、寺の子もふくめて、子供達の恰好の遊び場である。季節の訪れとともに谷川の芹、沢がに、いたどり、山いちご、ぐみ、柿、ぎんなん、むくの实、くり、しいの実、どんぐり等々、大いに楽しませてくれた。もっとも、へび、とかげ、いもり、やもりの類も多かった。

冬になると深い雪であり、寺の参道はすばらしい子供用ゲレンデとなる。寺の子は、ろーそくを持ち出して、スキーの裏に塗ってやる。楽しい冬の遊びも、終りに近づいた頃、二月十五日のねはんえがやってくる。お寺で

櫟 並 木

堤 古 都 子

(戸塚第二小教諭)

バス通勤をしている私はバスの窓に移る景色を見るのが好きだ。バスは多摩霊園から人見街道を経由して三鷹駅に出るのだが、人見街道には武蔵野の街道によく見られる櫟並木が大沢から野崎にかけてある。私は特に櫟が好きである。四月も半ば過ぎると櫟の梢は薄緑にけむって、ややかすみがかった空に梢がのびて春の来たことを告げる。五月になれば新緑に蔽われて風も快ちよげにわたり、時に旧家の何十匹の鯉のほりが葉かげに見えがくれる。夏の夕暮は大樹の影も長くなり、昼間の暑さを一時忘れさせてくれる。秋には梢の先々から黄ばみ、澄んだ青い空に金色に照り映えて美しい。そして十一月も末になると、こがらしと共に葉をすべて落とし全く裸の幹と枝になってしまう。

これらは四季それぞれの趣があって美しい。単に美しいだけでなく、安らぎを与えて

涅槃の世界としての浄土

二月は涅槃（ねはん）月ともいわれます。それは、お釈迦さまがお亡くなりになられた月だからであります。

ねがはくは花の下にて我れしなん

そのきさらぎの望月のころ

これは西行法師の歌ですが、自分も死ぬときには、お釈迦さまと同じように、二月十五日に桜の花のもとで死にたいという意味でありましょう。その頃は旧暦でしたから、涅槃月にも桜が咲いたのでしょう。

お釈迦さまは、八十才のお年でお亡くなりになられました

た。

○

お釈迦さまは、人びとにみ教えを説くために旅に出かけられました。その旅路の途中で鍛冶工の子チユンダのささげた食事をうけられて、それがもとで病いを得られて亡くなられたのです。お釈迦さまの死をまねいたのが、チユンダのささげた食物によってであることを行ったとき、かれは身をうちふるわせて悲しみました。そのとき、お釈迦さまは、チユンダをやさしく慰められたのです。

『かつて少女の牛乳のほどこしをうけて、さとりを得たときと、いまチユンダより食事のほどこしをうけて死をむかえ

たときと、その果報に差別はない。なんとなれば、仏の身は永遠であって、いわゆる生まれ、食し、死するものではないからである。』

人びとが、この世に対して執着をはなれしめ、生死のながれをこえしめんがために、み仏は死をしめしたのであるというのです。

そしてみ仏は、みなのおねがいをおさえて、つぎのようになんて言われていた。



『仏のひさしく世に住せんことをねがってはならぬ。まさに世界をみよ。ことごとくみな無常である。生ずるものはみな死に帰する。わたしは、この世の彼岸にわたり、一切の苦をいで、ただ無上の樂をうけるものである』

チユンダは、そのような方便のために、お釈迦さまは、死につかれたことを理解することができましたが、しかしな

お、深いうれい悲しみをおさえることは、どうすることもできなかったようでありました。

○

涅槃（ニルバーナ）とは、もえさかる煩惱の火が消滅したことを意味します。それは静寂なさとり境地をさしたものであります。煩惱とは、人生の現実のすがたが無常であり、相対的なものであることを知らずに、それに固執するところからおこるものでありましょう。

さとりとは、現実のすがたを達観して、それをこえたところに、永遠であり、絶対の世界があり、心の真のよりどころがあることを体得することといえましょう。

永遠であり、絶対の世界は、さとした人、すなわちみ仏の涅槃の世界であります。

しかし、それは、現実世界とは遙かにかけはなれて存在するとか、内ふかく、じっとひそむものではありません。もしそうだとすると、永遠の絶対の世界は、現実の世界と相対し、対立するものとして、絶対的なものではなくなり、真の永遠とは、いうことができません。まことの永遠の世界とは、ここに対するあそこなどというように、対立とか限定をこえた空不二なものであり、無限なものであります。

ここに対するあそこでないということは積極的にいえば、

永遠の絶対の世界は、ただいま、ここにあるということにもなるわけです。

○

わたし達の生活する現実の世界―差別があり、相対立し、有限の世界を此岸といい、それをこえた彼岸の世界を、み仏の住したまう浄土といいます。

浄土とは、すべての苦しみ悩みから解脱した涅槃の世界であります。それは、人生の生死のくさりから解放された、真実の安樂の世界であり、あらそいのない平和な世界をいうのです。

また、それは、ぼさつ行の力で出現した功德の世界であり、真に生きぬく働きをもつ生命の世界ということもできましょう。このように、涅槃の世界が浄土といわれることによつて、み仏の住処である意味が、一層あきらかにされるのであります。

しかも、浄土は穢土に対してたてられるのであります。人間が、ほんとうに生きる道を失ない、煩惱や妄念に引きずられて、不安と焦燥におわれつつ、罪惡をつみかさねてゆく濁乱の穢土に対して、かぎりない光りある生命のかがやく浄土が建立されているのです。

その浄土は、西方十万億土にあるといわれます。穢土に対

して、浄土がたてられるとき、その両土の距離は、十万億土のはるかかけはなれた存在といわなくてはならないでしょう。

なんとすれば、浄土は、夢想したり妄想したりして実現しうるものではなく、み仏だけが実現しうる世界だからであり、わたし達衆生の能力では、とうてい実現することのできない世界だから、それは、十万億土のかなたといわれるのです。

○

しかし、あみださまの浄土が、たとえ十万億土のかなたにあるとしても、わたし達のゆくことのできない、かなたではなく、あみださまの願力によると、それは即得往生であり、一瞬にしてふみこえることができます。しかも、確実に、きわめて簡易にそれができるのであります。ゆえに、浄土は遠くて近い存在ということもできましょう。それは、ただ「なむあみだぶつ」のお念仏のなかに味得されるものであります。あみださまの願力には、すべての生きとし生けるものの願いや、祈りがこめられており、お念仏とともに生活するとき、みずからの力が最大限に發揮されることになります。

お釈迦さまの涅槃の世界はお念仏を通してこそ、了解することができるといえましょう。

ご法語をいただく

内はをろかにして、外にはかしこき人とおもはれんとふるまひ、内には悪をつくり、外には善人のよしをしめし、内には懈怠の心を懷きて、外には精進の相を現するを、真実ならぬ心とは申せ。外も内もありのまにてかざる心のなきを、至誠心となづくるにてこそ候めれ。

（大胡太郎実秀へつかはす御返事）

陰日向なく振舞い、同じように働くものを正直者といい、人前だけを飾る心を卑しい根性だといいます。人として常に卑しい心を矯めてゆき、正直者であるよう努めたいものであります。ましてお念仏を申す時には正直な気持ちで申さなくてはなりません。

お念仏を申す者の心のすえ方として、経文には三つの心があると記されています。その第一はここにいう至誠心であります。法然上人は、この三つの心といっても何も特別な難

しい心の持ち方でなく、第一の至誠心というのは、正直な心のことであると教えられました。

利口ぶるとか、才子ぶるといふ言葉がありますが、こういう人達をぶり屋といいます。ほんとうは特別な才能一つないくせに賢人ぶる人があります。またほんとうはろくな事をしないくせに、人前で善人ぶる人があります。また同じように内心は怠け者のくせに、人のいる所では努力家らしくしてみせる人があります。こんな人たちのことを不正直者といいます。懈怠はなまけることであります。仕事に向って一踏張りしようとする、その裏から苦勞するのを嫌がる気持ちが生じます。このように努力をしようとする心にブレーキをかける精神作用を懈怠といいます。これとは反対に精進は努力することを行います。

善導大師は経文にある至誠心を解釈して、これは真実の心という意味であるといわれました。善導大師のこのお言葉を更に法然上人が説明されたのがこのご法語であります。従って、こうした不正直な心を真実でない心というのだと申されたわけであります。同じこ

とをいま一度いい直されて、外も内もありのままに振舞い、人前を飾ることのない心を至誠心というのだと申されたわけであります。

このご法語をもう一度いい直しますと、経文に至誠心と説かれています。何が特別な心のあり方でなく、外も内もありのままに振舞う正直な心のことであって、人は誰でもかくありたいものであるが、お念仏を申すにはまず正直な心がなくてはならぬというのであります。

「至誠心といふは真実心なり。その真実といふは、身にふるまひ口にいひ心におもはん事みなまことの心を具すべきなり。すなはち内はむなくして、ほかをかざる心なきをいふなり」

このご法語も同じ意味であって、内容が空なのに外面だけを飾るような心のないこと、表と裏の区別のない心の説明であります。

ところが世間では表面を飾り裏面では何を考えて何をしているか判らぬという不信用さが充満しています。人が人を互に信用する気持ちが薄れています。ここにも念仏信仰を更に広めねばならぬ意味があります。（村瀬秀雄）

現代社会の動きと宗教の役割

— 浄土のビジョン —

司会 お話がおのずから宗教—仏教の問題にはいり、学長先生は、仏教自体にもいろいろ問題があるとおっしゃられました。がしからば、仏教が現代の我々に果す役割は、局長さんのお話のように、個人信仰になってきた、そのように変化して行く。又仏教がそういうものに、どのような形で働きかけてゆくか、又役目を果してゆくか、こういう問題が出てくると思うのですが、この点についてひとつお話をうつつしていただきたいと思います。

世界宗教界の目ざめ

松本 先刻からお二人のお話を聞き考えさせられるものが多々ありました。私は南方仏教について古くさい考えをもっていたが、戦後南方との行き来が激しくなっただけで、戦前と。大体において、最近仏教のみならず、世界の宗教界が目ざめなければならぬという意識をもってきた。キリスト教も長い伝統のなかに強固な地盤をきずきあげてはおりますが、しかし、今後の人間を今のキリスト教の形体で指導しうるかどうか、という点について、非常にうたがいの目をもっている。

これは私が思うのでなくて、キリスト教のなかの人自体がそう思っているといわれている。今ローマで非常に歴史的な大会が、長い月日におこなわれている。最近おもしろい一つの出来事として、新旧両教徒のたたかいというものが長いものであった。深刻なものであった。ところがそのもっとも頑固であったカソリックの方から、新教に対してはカソリックも非常に反省しなければならないということをお公然と云いはじめた。これはカソリックだけでいけたものに、なぜプロテスタントというものがおきたか、というところに反省がおこなわれたのである。それと同時に、新教がおきたのちにおいても、カソリックが新教に対し、対策攻撃戦闘をおこなってきたものに対する深刻な反省をおこなったと思う。これは非常によろこぶべき現象であって、キリスト教がここで互に仲よくし、将来の人類を救済していく上に協力一致して進んでゆくという現象は、まことによろこぶべきことだと思います。

南方仏教と日本仏教

それから、南方と交通が激しくなり、南方旅行する人がふえ、南方のテラバード即ち上座仏教と称している南方仏教の戒律の状況などをみて、まるきり南方仏教一辺倒のようなことをいう人も、なかにはボツボツいたが、しかし、あのようなものが、仏教の本来のすがたであるかどうか、私はそうとは思いません。あのようなものがあらわれたからこそ大乗仏教があらわれた。そのような意味において、いまの南方仏教の悉くが脱皮しなくてはならない。本来の仏教の面目を脱皮しなければいかん。そうしなければ、これから復興しようとする南方の民族は、あの仏教のなかに指導理念をうみだすことができない。だんだん離れてゆくと思う。

これは南方仏教に対する我々の考えだが、それならば日本の仏教教団はこれでいいだろうか。いやいけない。これはいまでも局長がいわれたように、非常に反省を要することであり、具体的に改善の一步をふみだして行かなければいけない問題です。

共産主義と仏教

ただ、ここで一言いっておきたいのは、日本においても南ベトナムにおいても、ことに南方、とくにセイロンの仏教会の動きをみても非常に警戒しなくてはならないことは専門の仏教者が、いろいろな平和的な名前につら

出席者

松 本 徳 明

(大正大学理事長・芝学園長・文博)

佐 藤 密 雄

(大正大学々長・文博)

鵜 飼 隆 玄

(浄土宗総務局長)

司 会 安居 香山

れて、共産主義に巻きこまれるという傾向がある。南ベトナムにおいては、カソリックに反対するためにベトナムに利用されるというようなことがある。これは、ごく社会現象として並べた時には、又別の見方があるだろう

が、仏教者の目からみて注意しなければならないのは、共産主義がいかなるものかということ、全然知らない人が、社会の矛盾をつく民族独立をとええる共産主義の行き方に対して無条件に合流するという傾向がある。

ところが、共産主義と仏教とは相い容れないものがある。ところが仏教者は、あの行き方をみてヒューマニズムとまちがえてはいないかと思う。非常に人道主義的なヒューマニズムの行き方と思って、仏教者はこれにとびこむという傾向がつよいように思う。これが日本をふくむ東南アジア全部にいえると思う。

仏教はもっとも徹底したヒューマニズムです。しかし共産主義というものは、そんなものではない。それを否定してマティアリズムの上に立つ考え方であって、根本的に違うのである。そこを我々仏教学者は、今後の世界思想に対していろいろの貢献をする場合には、はっきり考えておかねばならない問題だと思えます。

個人の信仰の問題

つぎに個人の信仰の問題ですが、私は、そこへ行ったならば、仏教のなかにおいては、絶体に浄土教が重きをなすものだと思います。現在は、世界に禅ムードがおきておるが、これは日本人のおもいがりであって、世界にそんな禅ムードなぞありわしない。世界的にみて、仏教はそんなに問題にされてはいない。しかし、そのなかでも仏教に興味をもつ人は、多く禅のリズムに興味をもって来ておる。これは事実です。しかし、ヨーロッパ人が、まず仏教に入って或は興味をもって研究してゆく上にもっとも手取り早いのは禅である。これは理性の世界において考えられる一つの行き方であって、この禅ブディズムが徹底したところに、浄土教というのがあらわれるのであって、だから禅ブディズムで、この日本の仏教史をみても禅の高僧はお念仏を唱えておられる。

浄土教の果す役割

人間に、智、情、意の三つのはたらきがある以上、知的にながめた禅ブディズムが、感情の世界にはっきり地盤をおろして、そして

力づくよく歩いたところには浄土教があらわれてくる。世界の人間は、ヨーロッパの人間は禅ブディズムまでには、ある程度すすめるが、まだ未発達なのだ。しかし、発達すれば必ず私は浄土教的な、信仰生活に入ると思う。浄土教の信仰というものは、そういう風なものであって、この個人の生活、個人の精神生活或は全生活が浄土教の信仰によってうごいて行く、生かされて行く、というところまできて、はじめて仏教は完成させられる。

律だとか、禅だとかというところにこだわっているのは、本当の仏教ではない。律、禅を排撃するのではない。それをひっくりかえして、しかも自分の信仰の規定として、基盤としてはっきり仏教をあらわしてゆくならば、浄土教があらわれる。

そこに私は、浄土教の非常な重きをなすものがあると思う。今後、宗団がずいぶん前進して行くことと思うが、前進すればするほど、個人の信仰や生活を充実させる浄土教信仰というものを、もっともビュルファイして、歴史的な夾雑物を取り去って、現代生活のなかにこれを活かしてゆくということが中

心でなくてはいけない。現代は、科学技術が発達しているときなので、より以上に私は仏教のあらわれるチャンスがあると思います。司会 松本先生のお話では、おのずから浄土教が最高というか、指導的な役割を果さなければいかんというところにまいりましたが、学長先生はいかがでしょうか。ふりかえって全般的に仏教が果たす役割というふうなもの、現代の問題と関連して、どのようにお考えでしょうか。

ムード的仏教

佐藤 私は、先般オリンピックの開会式にいったのですが、開会式の天皇陛下がいらっしゃる時と、お帰りの時に、オリンピックの鐘がなった。電子音楽でNHKがやったのだが、これは黛さんが作曲されたのです。これに出てくるのは、知恩院の鐘、黒谷の鐘、高野山の鐘のほか二つ三つ入っているのだが、そういう鐘が鳴り響いた。その次の日にいろいろな人がこの鐘について批評をしていた。ところが、作家の三島由起夫さんだけが聞きなれないから違和感を感じたといっ

ていたが、あとはみな賞めていた。あの大きな広いグラウンドに鳴りひびいたとき、私は非常に感銘をうけた。どんな感銘かといわれても口ではいえない。

これに象徴されているように、いまはムード的仏教が盛んではなからうか。昨日私にある出版社から「仏像百体」という本を送ってきたが、いま日本では毎月二つか三つの勘定で、美術の書物が出版され、このほとんどが仏像の鑑賞、もしくは仏教建築の鑑賞になっている。そうすると、いまは、ムード的な仏教がおこなわれていると言える。

これは我々にとって重大な事であり、これがこのまま、ほんやりすごしてしまえば、ムードとして消え去って行くという事になる。

とかく人間は、あきやすいものであって、以前にあったジャズのムードから、漸く平和的な社会環境が落ちついたので、そういう古典ムードが出てきて、そして、さいわいにして日本の文化をやしなったのが仏教であったために仏教的なムードになっておる。それで安心して我々が仏教的な社会ができて、そこからそのような運動がたちのぼるというよう

な感じをもつ錯覚におちいつているのではないか。それを気をつけなくてはいけない。ムードがあつて、それが実体を重ねておらないというところがある。

松本先生のいわれたような個人の自覚のところへもって行くべき義務が、我々にはあると思う。どうして、仏教、ことに浄土教が近代人にうけ入れられないかということは、しばしば聞くのであるが、それならば、どうして創価学会がおこなわれるかという事を反問しうるのであつて、それは、やはり、我々仏教を指導する立場のものが自覚して教えれば、そして努力すれば、ムードの中におるものに宗教的な自覚をおこしうると考える。

極楽浄土のときあかし方

なぜならば、それは浄土教は極楽浄土というものは、実在するかという問題になると、それは誰れも手にしたものでなし、目に見たものでもない。そしていままでは、それはお経に書いてあるから、誰れだれがいったからということですんだけれども、自覚的な現代の人間にとっては、それはおのおのが、行

為をもつて実在を感得するまで、おのれの行為をつづけて、そして自分の自覚をおこさなければならぬ。実在する極楽を、本当におのおののために実在せしめるためには、その人の自覚が必要だし、その点では我々は努力しなければならぬ。私は常に、浄土教の問題が出るたびに、どうしたら宗教家の責務を果たせるかと、こう聞かれるのですが、その時は極楽があるとか、ないとかと、つまらない事をいうより、我々はそれがなくては、人間の生活がなり立たないものである。という面を強調するということが、宗教家の一番大切な面であるというようにこたえるのです。

業界一の銅瓦葺専門店 広告の責任重し
何代も研究せる卓越せる技術は他所の出来ざる価値ある技量と優美頑強安価を誇る
赫々たる定評ある当方へ。建設者請負業者も他所の倍以上保つと他の広告に迷わず遠方でも是非とも設計相談乞無料

東京都文京区春日一丁目九の二八

銅瓦葺協会
相談役顧問
設計及監督
石 黒 工 業
電 (八一二) 一五五二

浄土信仰問答

タタリはあるか

藤 井 実 応

(浄土宗布教師)

「先生、タタルということはあるものでしょうか。」

毎月一回、別時念仏会の行われている名古屋市熱田の雲心寺での或る日、一婦人が私の控室へ来てたずねられるのであった。これに類する質問にもよく出会うのであるが、この人はどうしてそれが問題になったのであろうか、私はその質問者に質問した。

「どうして、その事が問題になったのですか」

すると婦人は

「私の顔を御覧下さい」といわれる。

今迄度々お目にかかっているのであるが、改めてお顔を見ると、顔の左の方が時々ピクリ、ピクリと動くのである。

「あなたは顔面神経痛ですか」とたずねると、

「イエ、よく顔面神経痛かとたずねられるのですが、そうではなく、仲々なおらぬ病気です。それで私の顔を見て、或る宗旨の人が、それは御先祖がタタッているからそんな病気になるのだといってその宗に誘おうとせられるのです。私は、イエ私は御先祖を大切にしているからそんな筈はありません」と、御先祖は大切にせられても無縁の霊がタタルのですといわれる、そんなことはないと思うけれど、そういわれると気もちがわるいです。二河白道のお話も聞いておりますので、そんなことに迷うてはならぬと思いますが、心がすっきりいたしませんので、その点を明かにしたいと思うてお教え願うわけです」といわれるので私は答えた。

「結論からいうとタタルということはありません、たたりがあつて病氣をするとか、或は何かの靈がのりうつて病となるとかいうことは民間によくいわれることですが、要するに迷信です。たたるに似た現象はありますが、それはたたるというより、その人自身の行為が、社会の通念に影響されたりして、いかにもたたるかのように思われるのであつて問題はその人自身にあるのです。だからたたられるなどとまごつきたく無いですね、病氣の専門はお医者さんですから、無論、あなたは医師に診てもらふたでしょうね」

「私の弟が医師ですから、よく診てもらいましたが、これはキック病とかいうて、一種の神経の病で、珍らしい病氣とかで現在の医学ではなおらぬと申します」

「その病氣は痛みますか」

「痛みはしませんが、何となく不快で、他さまに見られるのが気になります」

「痛みのないのは何よりですね、他人の見られるのが気になるのももつとも思いますが、私はあなたからそういわれてはじめて気がつくほどで、他の人でその事を氣にとめるのは特別の人ですから、その少数の人が何と思おうとも、そんなことはその人にまかせておくことですね、現在の医学でなおらぬというても、将来なおる道も開けるかも知れ

ませんが、やはり専門の医師の言葉が一番たしかでしょう。なおらぬなら、なおらぬまま、一生涯その病と仲よくしてゆくことですね、それよりほかないでしょう、どうしてもこの病はうけてゆかねばならぬ、受くべきものは正しく受けてゆくぞという決意ができると、楽になるものです。先祖の靈がたたるとか、無縁の靈がたたるとかいうことはありません、殊に念仏は自他共にみ仏の浄土に生きゆくことのできる救いの大道です。自らが念仏するところ先祖もよろこばれ、先祖も共に往生できる道です。諸仏菩薩も共に護念下さる念仏の一筋道を力強く安らかに進ませてもらいたいものです」

私はそのほか次のことがらなどつけ加えてお話した。御婦人も明るい笑顔で退出され、今日も念仏を専らに修しておられる。

X X X

「タタル」ということは未開人的な考えが元になっているであろうが、この考えは科学の発達した今日、合理主義的な現代知識人の間にも問題になるのである。それは感情の世界に深く根をおろしている思想だからである。

靈魂という実在を考え、死靈に畏れを抱き、生きた人間に危害を与えるものと思われたり、特に死靈を粗末にとり

あつかったり、無謀なことをすると、精神的に氣に病んで「タタラレル」という觀念も生ずる。世帯盛りの愛児をもつ婦人が、無惨な死を遂げたとすると、彼女はどんなに生に執着し未練をもつことであろう、そして生き残って幸福に生活している人々をどんなに羨むことであろう、もしその彼女をいじめた経験のある人があるならその人は彼女の死霊が、彼に報復すべく働きかけると感じないであろうか、そういうことがもとになって所謂「タタル」といわれる現象が生ずることがある。しかしそれは、死霊のたたりというよりも、人間は道義的良心をもつ限り、そういう考えも生ずるのであって、死霊とか幽霊とかいう実在があるというのでなく問題は、人間の主体的な良心そのものにあるといえよう。

宗教学などというアニミズム（靈的信仰）やシャーマニズム（靈と人間とが交通できるといふ信仰）など、未開的なものが現代にも力強く残っている。靈魂の實在が信ぜられ、死霊は人間の運命を支配する、病氣などは靈が人間に宿る為に生ずるといふ信仰が元になって、所謂シャーマンは儀式というか祈禱というか呪術を以て、その靈を追出すとか、慰めるとか、或は和解せしめて病を癒す、その他不幸な境遇も同じ方法で転開せしめるといふのである。「もの

のけ」とか「神がかり」「きつねつき」などいわれるのも憑靈現象の現れというべきものである我國に於ても古代人のもつ宗教はシャーマニズムであつたといわれる。そして現代日本人もそれから脱皮し得ない状態にある。病氣平癒、家内安全、商売繁盛等所謂現世利益、現世祈禱を宗教の中心としているような新興宗教にも、また既成仏教教団の中にもこのシャーマニズムが基底となつていたのでないか。この問題は病氣、靈魂等の問題と連関していてなかなかむつかしい問題である。

（つづく）

真野正順博士著

定価 一二〇〇〇
送料 一〇〇〇

仏教における宗觀念の成立

第一篇 印度篇

第一章 原始仏教に現われたる教団意識

第二章 分派の分派と宗義

第二篇 中国篇

第一章 中国仏教における「宗」觀念の發生

第二章 中国における「宗」義とその限界

第三篇 日本篇

第一章 奈良平安兩朝の「宗」觀念

第二章 鎌倉時代の「宗」觀念

◎ 本会で取り継ぎいたします。

創価学会手引

公明党の二つの解説書

創価学会の理事長であり、公明党の委員長である原島宏治氏が、十二月五日、五十五才の若さで突然死去した。人生無常と言えばそれまでであるが、事、学会にとっては大問題である。何せ、会長に次ぐ重要人物であつてみれば、一大損失と言う外ない。実際に学会は慌てたに違いないが、表面的には一向その気配がなかった。むしろ、不思議なほど冷静であり、極めて機械的に新しい理事長と委員長を選んだ。

しかし、ここには逆に学会の不自然さがあらわれている。事もなげに、冷静に処理した所にこそ、学会の会員と、社会に対する欺瞞があつたと見たい。何故ならば、学会の信仰からすれば、五十五才の若さで、重要人物がコロリと死ぬなどは考えられない事であるからである。この早死を、一体何と説明するのであるうか。まさか、信仰が足りなかったとは言えまい。聖教新聞には、「一度前に死にかかったのを、ここまで生き永らえたのだ」

と説明しているが、これがせめてもの説明である。常日頃、信仰談義が現世利益的であるだけに、こんな所に、とんだ穴が出来るのである。それにしても、学会員達は、こうした事に、何故気が付かぬか、不思議でならない。

それはともかくとして、最近、公明党を解説した二つの本が出た。一つは村上重良氏の「創価学会と公明党」であり、もう一つは、高瀬広居氏の「公明党」である。この二つの本は誠に対照的なものであるだけに、読者は、その立場をよく見た上で、読む必要がある。

村上氏のは、氏の学者的立場に立って、出来る限り客観的に、諸種の統計を使つての、批判的説明書である。例えば、信者の戸別調査をして、入会者と脱会者の比較をして、已にその半分は、脱会しているか、信仰していない事を証明するが如きである。更に、そうした問題や、学会の含む諸問題を、宗教社会学の観点から批判説明したもので、われわれ

の大いに参考になる所である。逆に、これは学会にとっては手痛い批判書である為、学会側は、懸命に反撥している。日本人全体が、こうした立場で、冷静に学会をみつめる事が必要である。勿論、村上氏には氏なりのイデオロギー的立場もあるので、その点に立った批判である事も、知らねばならない。

一方、高瀬氏のは、自から評論家たることを認めての上で、学会の中に入り込んで、学会を直視するのだとする立場で書いている。これは、確かに、学会に入り込んだ上で執筆している為、学会内部の実体を克明に書いている。しかし、氏の立場が、已に学会的であり、むしろ是認する立場である為、正邪の別が忘れられている。いささか、学会の提ちん持ち的内容である。学会側が大いに推賞するのは当然である。氏が、どうしてこれまで支援的なのかと首をかしげなくなる程である。しかし、公明党の未来像の如きは、学会の意図が明示されたものとして、注目してよい。眉につばをつけながら読めば、参考になる本である。(村上氏、日本文華社発行、二七〇円、高瀬氏、学習研究社発行、三三〇円)

浄土風土記

寺光明山照天

鎌倉市材木座

神奈川県鎌倉駅の南東約二キロの地に浄土宗大本山光明寺がある。歴史的な旧跡の多い鎌倉にあっても、観光ルートに直接面していないため、かけ足見物の一般観光客、修学旅行者達の訪れることが少い。為にか、今もって昔のままのたたずまいと静寂さを保っている。

光明寺は、天照山蓮華院と号し、その昔は鎌倉四大寺の一つであり、弥陀の十八願に則って定められたという「関東十八檀林」の一に数えられ、「元和寛永の頃八十余宇の学寮」を有する関東屈指の学問所であった。

往時、鎌倉住吉谷悟真寺に住していた良忠上人（記主禅師）を開山として、佐介谷に蓮華寺が創建された。後に悟真寺・蓮華寺を合せて光明寺と号し、今の材木座に移した。この移転年代に就ては異説あるが、寛元元年（一二四三）とされている。明応四年後土御門天皇は、光明寺を勅願所と定め、代々の住持に紫衣の被着を許した。同年三月八代観音祐崇上人は、上洛して「阿弥陀経」を下賜せられ、「十夜法要」を営むべき事を勅許された。この時、「関東総本山」と称する事をも併せ

て許されたのであった。以来、絶えることなく、現在も十月十二日より十五日まで「引声阿弥陀経」（第五十七世義誉観徹上人に依って中興される）を中心とする十夜法要が定められている。この光明寺の十夜法要に際し



（開山堂）

て、門前には植木市が立ち、露店がたちならび、境内には見せ物小屋・サーカスが小屋がけをし、鎌倉をはじめとする近郷近在の人々に、なにか郷愁にも似た、秋の季節の風情を感じさせている。市内の或る小学生の眼にう

つった「お十夜」の作文をここに……

おばあさんが、「十四日は光明じのおまつりにつれていってあげましょう。」といいました。雨がふったのでいかれないとおもっていましたが、おひるからはれたので出かけました。

おおぜいのおほうさんがならんでおきょうをあげていました。おちごさんもきれいなきものをきていました。とおりにはいろいろなおみせやさんがたくさんでていました。おもちゃやにはにんぎょうやままごとやビストルがありました。おまんじゅうやさんはポッポとゆげをたてていました。

へんなおじさんが、ちをうんとのでへい気でいました。

九ほんじのあたりには、うえ木やさんがたくさんならんでいました。おばあさんは、

「かきの木がほしいね」といいました。

いもうとはあれもほしい、これもほしいといっておかねをつかいましたが、わたしはなにかいませんでした。

うちにかえって、おかあさんにお十やのおはなしをしてあげました。

——つづりかたことも風土記——

又、同寺には寺宝も多くあり、中でも国宝紙本着色『当麻曼荼羅絵巻』二巻は有名であり、重要文化財、宗宝指定の宝物も多数現存



(良忠上人墓所)

している。

現在の建物も総門・山門・本堂と一線に並び、左手には開山堂・書院・方丈と軒を連ね、大本山に恥じぬ偉風を古色と共に見せている。なかでも弘化四年に再建された山門の

落ちついた姿は、訪れる人の心を必ず質実剛

健を旨とした鎌倉武士のもとに走らせずにはおかない風格を持っている。この静寂な山内を東京オリンピックの際には、青い眼のフランス人数十名の宿舎として供し、本当の日本の空気を満喫することが出来たとかなかなか好評を得た。東京オリンピックに来日して真の日本の姿に接して、夫々の国に帰ることの出来た外国人は、はたして何程あったことであらうか。

忘れてならぬのは、天照山の中腹の今なお苔むす鎌倉石の参道の奥にある開山上人をはじめとする当寺歴代上人の「代々墓」である。小生の訪れた時には師走の寒風に苔も色を失い、落葉の舞う墓前に赤い椿の落花が一入の静けさを呼び、思わず襟を正す敬虔の念に心洗われる思いであった。

現法主であられる大野法道大僧正は温和な学徳兼備の、道俗の信望篤き方であり、大正大学に永く教鞭を取られ、その御声に接した方々も少なくないであらう。

交通・横須賀線鎌倉駅下車

バス 逗子行又は光明寺行光明寺前下車

鈴木 積 善 氏

高 橋 良 和

(中外日報取締役)

大正から昭和にかけて、浄土宗は各宗にくらべて児童教化運動において断然たる地位を占めていたのである。それというのも、児童教化にその人材を有していたからで東西によりき指導者をそろえていたのである。大阪の長谷川順孝、京都の塩釜義詮・東京の鈴木積善・鶴飼俊成・三輪寿雄などの先輩たちがそれぞれ宗教大学時代から児童教化に従事して、自坊にかえってから後もその地方で熱心に児童教化の開拓にあたったのである。

それらの先輩の一人

に鈴木積善氏がいることを知っている人は今の若い世代の人では少いのではないだろうか。

東京に出かけていって小石川の表町の伝通院の前に会館があったのは、戦前のことである。もちろん今も同じ会館の建物はあるが、それは且つての伝通院所有の伝通会館が同院からはなれて終戦後再び修覆されたもので今は昔の語り草であるが、この伝通院の伝通会館の主事が鈴木積善氏なのである。

わたしが鈴木積善氏の名前に親しみをおぼえたのは、浄土宗児童教化史を研究しはじめてからであるが、それまでにはこの鈴木積善氏とは何回もお会いして指導をうけていたのである。当時といっても明治の末から大正にかけての宗教大学の児童運動のなかにはこの鈴木積善氏の名がいつも出てくるのであって、宗大の児童教化事業の恩人ともいえるのである。

その頃宗務では仏教日曜学校教案なる書物を刊行している。これが鈴木積善氏の執筆なのであって、それからあと西本願寺の大関尚之氏が同じように日曜学校教案をハワイの本願寺教団の依頼をうけて著述したことがあったが、その書物と前後して浄土宗のこの教案が刊行されたのであって、今ならこうした書物をみてそう驚かないかもしれない。

が、文書活動はもちろんのこと、日曜学校の教材などカケラもないときにこの本の刊行、しかも二巻に及ぶ大著述は宗門のこの事業に対する大きな羅針盤ともいえるのではなにかと思うのである。

こうして鈴木氏は児童教化の大先輩としてでなく、先に述べた伝通院が建設した伝通会館の主事として会館事業に新しい足跡を残したのである。凡そ仏教の会館事業は昭和三年に出来た知恩院の華頂婦人会経営の華頂会館がその最初であったが、この会館は今も昔も変わらずこれという教化事業に会館が活用されていないが、それに次で出来た伝通会館はさすが東都における会館としてすばらしい活動をしたのである。ホールは五百人あまりのそう大きくない広さであったが、会館には宿泊施設も附設されていた。それよりも第一にあげたいのはパドマ合唱団の創設である。

このパドマ合唱団の指揮者は作曲家の弘田竜太郎氏や小松平五郎氏などで昭和のはじめに合唱団をもった宗門などどこにもなかっただけに鈴木氏の活眼にはおそれ入った次第である。これだけでも鈴木氏の活動のほどがわかるのであって、伝通会館の教化事業は日校に仏書にとすばらしく伸びていったのであるが天二物を与えず、鈴木氏は早く夭折したのはなんといっても惜しいことである。その鈴木氏

のもとにあって手足となって活動した浜野義光氏もつづいて若くして逝ったが、二人の児童教化の先輩が逝ったあと、終戦で伝通会館も伝通院からはなれてしまったが、あすこを通る度に鈴木氏のことを思い出すのである。

いつかの折といっても故人が逝って一二年すぎてからであるが、未亡人のところに焼香に赴いたことがあった。上井草の地に幼稚園をつくって、故人の遺志をついで、幼児教育に捧げられるのを見て心うれしくも思ったのである。

宗門の児童教化は今では保育事業のかげにかくれたかもしれないが、それはそれとしてもその創世紀の一頁にわたしは鈴木積善氏の名を太く大きく彫りつけたいのである。

伝通会館ではたしか二階のところに主事であった鈴木氏の部屋があったようにおぼえている。

児童教化のことを尋ねても親切に指導してくださったし、後輩のために大きな力となって教えてくださったこの鈴木氏に対してただただ後輩はお礼を申しあげる次第である。

棘の道であり、陽のあたる場所でない児童教化の道に光をあててくださった人として、鈴木積善氏を称えたいのである。

東南アジア旅行記(八)

佐藤 行 信

(大正大学講師)

十二月二日

ニューデリー発十六時四十五分のインデア
ン・エアライン・コーポレイションのバイカ
ウントでアラブに向った。アラブ迄は四十五
分であった。

このアラブは、ムガル王朝時代の十六世
紀初から、十七世紀の中頃まで、インドの首
府だったところである。このアラブは、タジ
マハールがあるため、現在のインド旅行には
欠くことができない観光地である。なお我々
は空港よりバスで、いったん宿のローリス・
ホテルに行き、荷物をおき、夕食をすませ
て、現在、世界的な名建築と云われている、
タジマハールを見学に行った。丁度、天候に

めぐまれ、おまけに満月の晩にあたり、実は
小生は、今晚が満月とは知らなかったが、御
蔭で月夜のタジマハールを見学できた。なお
タジマハールは、一般に公開されるのは普通
昼間だが、満月の夜だけ夜半まで開いている
のだそうだ。

タジマハールは、ガンジス川の上流、ジャ
ムナ川に臨んだ地にたてられ、この墓宮は、
回教徒建築の代表と推賞され、乳白色の大理
石で造られた豪華さ、その夢幻的な感動と調
和の美は、とても小生などの筆につくしがた
いものである。タジマハールは、マハールの
王冠と云う意味で、ムガル王朝の五代目の
王、シャー・ジャハーン帝が、愛妃ムムター
ズ・マハールの死をくやんで、一六三三年に

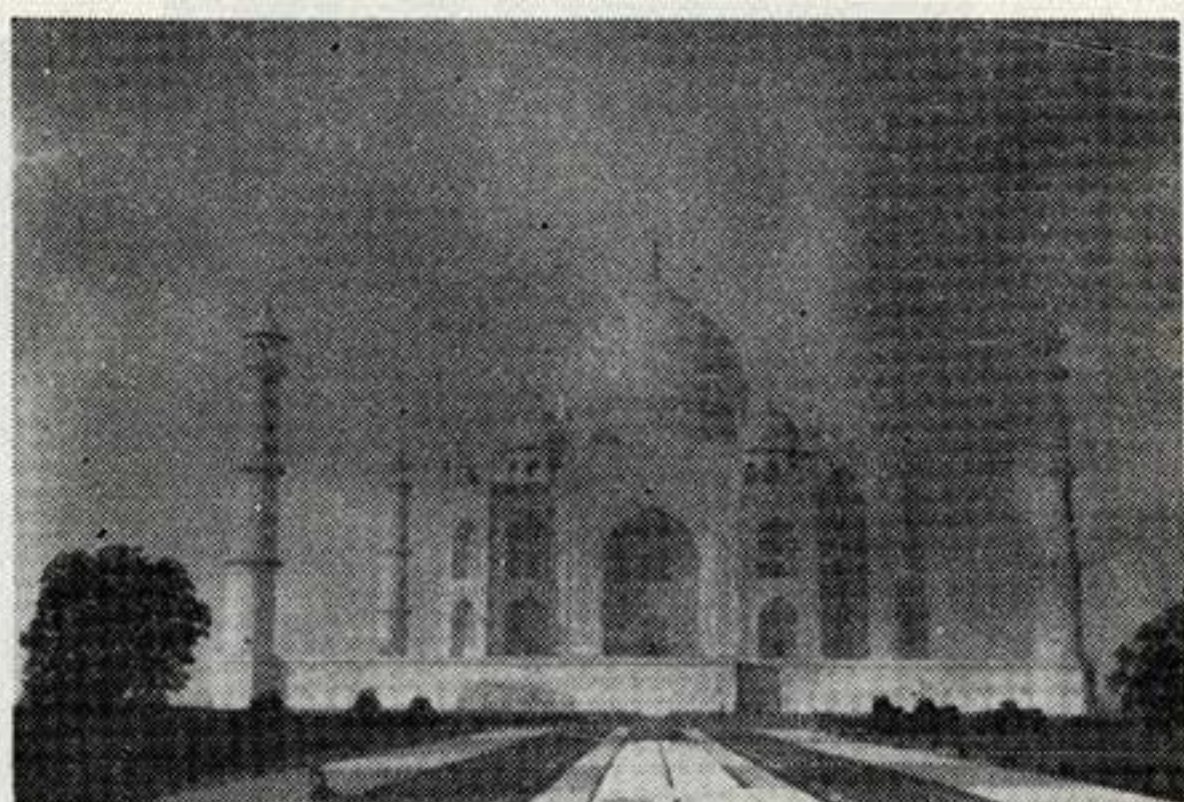
起工し、全国の財宝と美術工芸の限りをつく
し、二十二年の年月と国の財政を傾けたほど
の巨費を費し完成したものだそうだ。王の思
慕の情が丁度この月夜に浮かぶ美しい乳白色
の中央ドームに表現されているかのように思
われた。この総大理石の建物は、六十五メー
トルの大きいドームでその周りにはさらに四
つのドームがあり、テラスの四隅には、すら
りとした高塔がそびえている。これらのドー
ムは、四メートル程の高さの大理石の石組の
上にたてられていた。なお、最初、入口のレ
ッド・ストーンの門を入ると、参道の真中に
ある一直線に水をたたえたプールが、このド



(タジマハールの筆者)

ムと両脇の糸杉の美しい影を写し出す。このような景色を、夢のような超現実の美観とでも云うのであろう。又、ドームに近づいてみると、この大理石の壁面に描かれているのは、月あかりでも、よくみえたが、アヤメや、スイセンの花をアラビア文字に模様化したもので、それを緑や赤の石で象眼にしてあった。その巧妙さは驚く外はない。次にドームの入口のところで、靴にカバーをかけられ、ドームの中に入り、殿堂の中央のムガル王朝五代目の王シャー・ジャハーン皇帝とムムタース・マハール皇妃の寝棺が安置されてあるところをお詣りしたが、案内者の懐中電灯で照らしてみせてくれたこの棺の彫刻は、ジャスミンとケシの花の模様であった。この寝棺の安置してある部屋の周囲は夜でみられなかったが、都合八つの部屋があるそうで、全部乳白色の大理石で出来てるそうだと、月あかりでみる庭園もイスラム特有のすべて幾何学的な線と模様で出来ていた。それからドームの裏手に流れるシャムナ川をのぞきに行き、それから帰りかけ、また今度は、

まじかに月夜に照らされるドームをみた。帰りかけは、何度も月あかりで、プールに影を映す幻想的なドームをふりかえりながら、レ



(タジマハール)

ッドストーンの門を去りがたく出た。今日は夜で、カラー写真は写せなかったもので、また明日、サンチに向って出発する前に来たいと

思い、団員の方に話したら、一緒に来ようと言う人もおり、明朝、六時にホテルに車を迎えに来させ、再度見学に来ることにした。

十二月三日

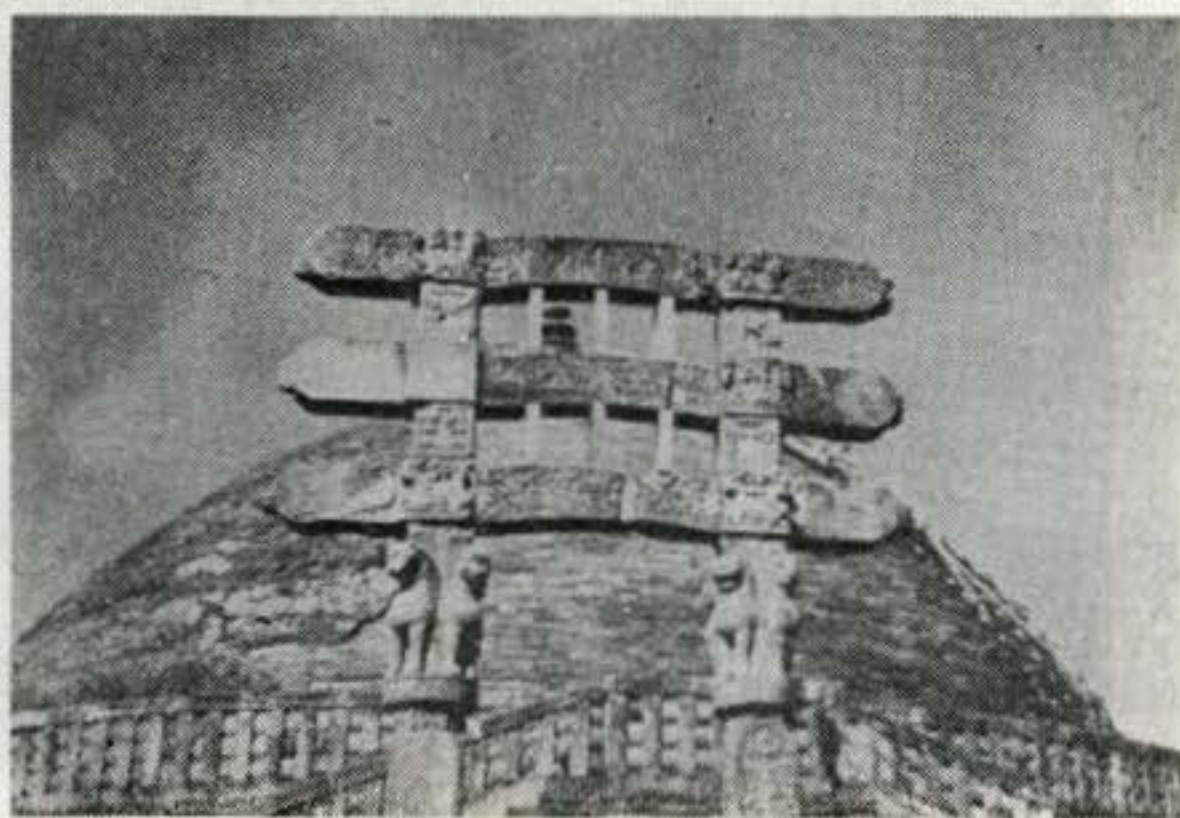
本日も好天気ですがすがしい朝であった。六時に車が来るため、五時半に起床して仕度した。丁度六時に車が迎えに来、一台に四人、二台に分乗して出掛けた。また早朝のタジマハールも、朝日をうけた乳白色のドーム、それに参道プールわきの緑の糸杉と芝生の緑がよく調和して、昨晚とはまた異なったあじわいがあった。カラー写真を撮ったり、大理石のドームの彫刻を見学したりして、八時半にホテルにいったん帰り、朝食をして、荷物をまとめ、アグラの駅に行った。本日は、サンチまで、約十時間汽車に乗るわけだ。この汽車は、エアコンディションがあり、印度で乗った汽車の中で一番上等であった。又、西印度の広大な田園風景も見物出来た。夜八時頃サンチに到着し、ツーリスト・バンガローに入り、今日は夕食をすませて早々にベットに入った。このバンガローは、い

ままで泊ったバンガローの中では一番良く出て来た。

十二月四日

本日はサンチの塔を参拝するわけである。バンガローから歩いて約三十分、山の中腹から頂上にかけてたっている。ここには、仏弟子、舍利弗と目犍蓮の遺骨が存在している。サンチは、阿育王が即位以前にいたところで、その子摩咽陀が仏門に入り、丘上に仏堂塔婆を立てた。サンチの塔は、創建年代は、西歴紀元前二百五十年頃、阿育王の時代のもので、全形を現在に留めているので有名である。塔身はすべて半球形をなしている。そしてその石門は、そのかたちが、我国の鳥居に類し、又、石欄、石門の表面には精巧なる浮彫を施し、仏の化導、本生経説相、仏の遺跡に対する礼拝供養等の行事を図にあらわしている。又、ここには、マハボディ・ソサエテの仏教寺院があり、セイロンのお坊さんがあり管理している。ここもやはり、印度政府の保護がよくゆきとどいており、よく整備されていた。この山の頂上は、なかなか景色の

よいところで、のどかな田園風景とともに、心やすらぐところであった。本日は、夜行で、ジャルゴーンに行くため、午後からも時



(サンチの大塔)

間があったので、昼食にいったんバンガローに帰ったあと、午後から、もう一度ゆっくり参詣しながら、写真を撮りに行った。夜は九

時の列車で、今度は、アジャンタ見学のため、ジャルゴーンに向った。この夜の列車は、やはり、スリーピング・バッグをもって乗った。カルカッタとガヤの間で乗ったのと同じような列車であった。

十二月五日

朝五時に、ジャルゴーンの駅につき、そこから一時間半位、車に乗ってバンガローに到着した。そこで朝食のため一休みした。またアグラから食事は悪くなっている。恐らくボンベイ迄また大したことはなさそうだ。しかしだいたいぶなれたことと、ニューデリーからボンベイの方が、カルカッタから、ニューデリーよりまだよいと聞いた。確かに、食事も宿も仏跡参拝してる時よりは、上等だ。朝食の後、午前九時より車でアジャンタに向った。アジャンタ迄は約五十分程であった。

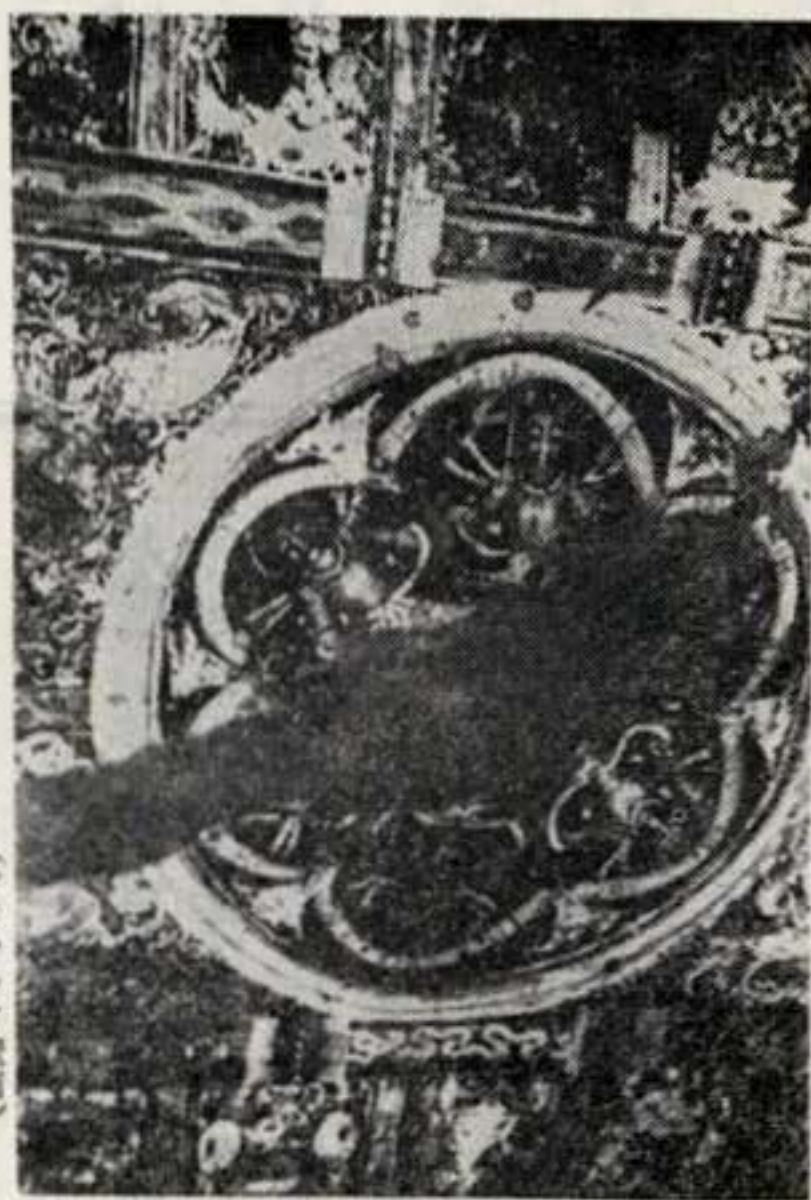
この西印度地方には多くの洞窟があるが、皆、異教徒に破壊されているが、このアジャンタの洞窟は破壊されなかった。当時としては、地険にして容易に近づくことが出来なかったためと思う。洞窟は、二十四ヶの寺院と

五つの仏堂からなり、その内面にある壁画の美をもって知られている。現在は、もうはつきりしないが、洞窟の壁間、天井、柱梁等に仏菩薩、天人等の風俗が描き出されていた。うでその年代は数世紀におよんでいるのとこのことである。その最も古代に属するのは、第九号、第十号の洞窟の壁画であり、紀元二世紀のものだそう。次は第十号洞窟の仏画で西暦紀元三百五十年から五百五十年と推定されるそう。壁画の多くは、崇仏信仰の作で、題を仏教伝説にとっているものである。ここらは現在でも夜は虎でも出そうなところだ。だんだん西印度にきたせいか、また暑くなつて来てアジヤンタの洞窟寺院の参詣を終ったあと、喉がかわき、オレンヂを買って咽喉をうるおした。しかし毎日好天氣がよくつづくものだ。確に、印度を旅行するのには、今ごろが一番良いようだ。

いったんバンガローに帰って昼食をすませ、車でオーランガバードに向った。オーランガバード迄は約六十マイルであった。しかし感心するのは、英国の軍事的な目的もあつたろうが、道路の良いことである。至るところ、舗装されている。しかし文化程度は道路でわかれると云われているが、インドだけは別な感じだ。このオーランガバードには、午後四時頃到着した。ここでは、セントラル・レイルウェイホテルに泊った。今日はもう予定がないので、二日ぶりで風呂に入り、夕食ま

ろ、舗装されている。しかし文化程度は道路でわかれると云われているが、インドだけは別な感じだ。このオーランガバードには、午後四時頃到着した。ここでは、セントラル・レイルウェイホテルに泊った。今日はもう予定がないので、二日ぶりで風呂に入り、夕食ま

大学である。アムベトカルと云う人は、ババサヘーブ・アムベトカルと云う名の人で、哲学博士等、外国で得た称号を六つももち、もと印度政府の法務大臣などやった人で、天才的な大人物であつたが、この人が仏教徒に改宗の後、この村もあの町もと云う有様で、ヒンズー教から仏教に改宗が行われ、仏教徒の数は、この数年間に急激に増大したのである。このアンベドカル博士に由来するカレッツジは、印度に三つある。第一はボンベイ市の南方にある、マハッド市のカレッツジで、別にここは仏教徒の大学と云うのではなく、博士が最初に運動を起したところである。この大学は、芸術、科学、商業の三部



(アジヤンタ壁画)

で休憩した。

門にわかれていそうである。第二は、ボン

なおこのオーランガバードには、明日訪問するミリンダ大学、通称、アムベトカル・カレッツジと云うのがある。このミリンダ大学は、今日印度において新仏教徒を多数生じた原因をなした偉人、アムベトカルが創立した

ベイにあるシツダルダカレッツジ、第三は、オーランガバードにあるミリンダ大学で、この二つは仏教徒の学校で、僧侶養成の学校ではないが、仏教精神により設立されているように、そして学生数もかなり多いようである。

悲 慈 の 仏

補 眞 子 金

(大 正 大 学 助 手)

時折見るテレビで鳥獸がその子を育てる尊さ、焼野の雉夜の鶴、この思いあって始めて子は育つ、まして人間の親子の情愛、子供の方には時には誤解もあるようではあるが、親は全く可愛さの一念に燃えて育て行くもので全く、この愛の力あればこそ、どうすることも出来ない子供達は本当に育てられるものである。思えば愛の力は偉大なものである。

さて、この愛には色々あって親子の愛から夫婦の愛、男女の愛、大きくは同朋愛から人類愛と非常に沢山考えられる。併し、これらの愛はよく考えて見ると、強いものではあるが、又強いが故に、時には恐ろしいことにもなる。可愛さ余ってにくさ百倍と恐ろしい結果となることもある。新聞紙上に報ぜられる刃傷沙汰や、あの情けなくも恐ろしい戦争も皆この結果なりと見ねばなりません。

この冬は、又良いお天氣が毎日続いて、暖かい太陽、美しい光、寒い時には、全く助かる思いであります。この太陽の有難さについて或会合で尋ねて見たことがある。高校生ではあったが、中には何をいうのか、と、さもさげすむように、太陽、月、地球、別に有難いとは思わぬ、と答えた者もあった。中には分りませんとも答えた。私は非常に淋しく、又それら恐ろしくさえ思いました。そのうちに一人のA君が手を上げて、僕は有難いと思う、と答えてくれた。嬉しいことだと

思い、その生徒に、君は、どうして、そう思うのかと尋ねて見た。すると、僕は新聞配達をして通学している。今日この頃の寒さ朝も仲々に夜が明けぬ。暗い寒い中、犬に吠えられ、身も心も凍ってしまふ、学校に遅れまいと努力する時、ようやく東の空が明るくなり、やがて太陽が昇ってくれる時、その生徒は大きく、「くれる時」と力強く云って、全く太陽は有難いです。と云いました。

人は本当に物の有難さが分るとき、太陽なら太陽が自分勝手に照っているのではなく、この私の為の照っていてくださると迄受け取れ考えられてもくるものである。否定したり、分らぬと云った者に、よく聞いて見ると、「有難い」という言葉は何か物を貰った時に云う言葉で、僕は別に何も太陽から貰っていない。と、こう云うのであった。併し、今、友のA君は有難いと、つくづく云うではないか、君達は幸福と云うか新聞配達もせず朝もいつ迄も寝ていられて、太陽のくれる光や、暖かさを感じずにいるのではなからうか、それに、もっと考えて見れば、地球上の生きとし生けるもの、一体、何によって、生かされているのであらう。若し、太陽がなかったら、どうであらう。生物は皆死滅してしまふであらう。今日、よく原子爆弾、水素爆弾は恐ろしい、ボタン一つで人類は、皆殺しになるといふ、而もむごたらしい姿となっ

て。太陽のなくなった、その時は、そんななさけない姿ではなからうが所詮、生物はみんな死んで了うのである。そうだとすれば、私達の生の根源である太陽の有難さは、本当には誰れでも知らねばならぬ大切なことであるはず。而も太陽は、人がその有難さを知ろうと知るまいと何のへだてもなく、昼も夜も照らし暖かい光を降り注いでいてくださる。夜だっても、太陽がないのではない自分達の住む地球が太陽の反対側になっているためで、太陽はやはり照らしていてくださるのである。それが証拠には生きとし生けるものは夜も昼も育つのである。ということを知らねばなりません。

今の世の人々の中には「畏敬の心」を忘れ果てて、何でも物を貰ったから有難いとか、物の生活になってしまつて真実の有り方を汲みとつて感謝の心の起らぬ人も多い。思えば、今日お互様に生きづらいのも、ここに一大原因のあることを知らねばならぬ。

又、私達の命は、深く深く考える時、この世限りの命とは思われぬ、無限の過去から現在へ、現在から永遠の未来へ、と生滅流転の生活をするものである。人は、この世に生を受けてから、どうしても免れ得ぬことは死の関門である。如何に生きのびても長くて七八十年、今日の如き交通地獄の世ともなれば、本当には一瞬先きも分らぬのが現実の姿と思

わねばなりますまい。そして死んでしまえばそれまで、とは所詮いえぬことを思う時、又、今現在人間生活している時、太陽は照っていてくだされても、意気消沈して真暗闇となり生きられぬ思いになる時もある。こんな時は、一体、誰れによつて見守られ育てられているのであろうか、所詮私等は親なくしては生きられぬ存在であります。

このような時に、ほのぼのと心配するな、我、ここにあって、いつも、そなたを見守るであらう、ぞと立ち給うお方こそみ仏であります。

生きとし生けるもの、私達人間と犬猫とを例にとって考えて見ても分るように、そこには同じ生物ではあるが、ちがった特性がある。仏と私達とも亦ちがった性質がある。一体み仏といわれる為のお徳の中で、最も大切なものは、「お慈悲」ということであると云われます。「慈悲」とは普通には、同情とか、なさけ心とか云われていますが、併し仏教では、そんな浅い意味ではなく、「慈悲」と二字合せて、それぞれに、「慈」とは、「不請の友」といわれ、友人同志の間でも、来てくださいますよ、と頼まれて来るようなお友達では真友、本当の友として温い心は感じられぬ、頼まれぬのに案じて見舞ってくれる友、どうしているか心配でやって来たが、やっぱり患っていたのか、来て見てよかった、苦しかったろう淋しかった

たであらうと云われる時、病める友は、どんなにか喜ぶことでありましょう。全く生きかえる思いのすることである。実に、み仏は、私達に対して、この思いでいて下さるのだという。すると仏はいつも私のところに来ていて下さるのだと思う。これが「慈」であるという。「悲」とは、「無尽の大悲」つぎることなき大きな悲しみではない。それでは、いやになつてしまふが、そうではなく、み仏の方で、なさけなき世の人々よ、勝手気儘な生活をして、苦から苦へ、暗から暗に迷うている。どうして真にさとれぬのかと、私達の生活の様子を見て、み仏がつきることなき大きな悲しみの心になりたまうということであるという。世の親が、不孝な子、か弱き子であればある程に不愍さ増して夜も日も、寝ても覚めても、その子を思うように、さればこそ、お経文には、「仏心とは大慈悲これなり」と説かれている。

私は、ここで、そういうわけで、み仏は、いつでも、どこでも、私達が生きている時も死の時も私達の上を御案じ下されているお方だと知り、この上なく、み仏を有難く親わしく思うと共に明るいい心地にさしていただき力ある生活に入らさしていただきます。

あの太陽が、この世の人が、その有難さに気付かずにおいて、何の分けへだてなく、この世始つて以来照らしお育てく

だされている、その有難さを知って、ああ太陽も昇られた、眠っていては相すまぬ、太陽と共に、今日も一日をと、すっくと心持ちよく起き上るのと、うるさい！ まだ眠いのだ！ 併し、お勤めが遅れますよ、と無理矢理に起こされて、不精無精に一日の生活に入るのと百千倍の違いのあるように、み仏も、本当には、十劫の昔に、成仏といって仏のみ位につかれてよりこの方未来永遠に私達を、お守りお育て下されていることよ、としみじみ有難く思い知り、み仏と共に出来るだけの真実の生活をしてこそ私達は、切角、人間と生れ出た甲斐もあり、又尊い大安心の救われの生活によみができることが出来るものであると思うのであります。

会 員 だ よ り

東京都下大島町元町

潮 音 寺

去る一月十二日、東京都下大島町大火にさいして、同町元町潮音寺様の安否をおたずねしてお見舞い状をさしあげましたところ、早速次のようなお便りがありました。

い戻り、渦まきとなって元町中心街を全焼にいたらしめました。当山檀徒は全焼しました。被災者への救援物資もようやく配給されるようになり、笑顔も見られるようになりました。これから立直るまでのご苦労は容易なものでないと存じます。

警視庁無線通信員ならび機動隊員、宿泊しております。日中は被災者お見舞い、夜、筆をもつの連続です。ご一同さまによろしく

早速にお見舞いいただき、厚く御礼申し

あげます。当山はおかげさまにて内外とも

無事火難より免れ得ました。当寺より一〇

メートルさきの日蓮宗一カ寺は、お気の毒

にも山門、本堂、庫裡を全焼す。この一刻

こそ当山にとって、最も危険な状況にあり

寺族四人（子女は中学三年女、中学一年の

男）と馳せ参じたる檀徒の方がたとともに

お念仏を称えつつ、必死の消火につとめま

した。三十一メートルの富士山おろしの南

西の風は、三原山につきあたって、再びま

豊川市光輝町二丁目四五

光 輝 院

前略 浄土の支部を開設 二カ月になり

ましたが、「浄土誌」を見るに、岩波の

「図書」よりも内容は貧弱、また吾人の宗

門協力の弱さを反省します。

一寺院十戸の会員を求むれば、随分と大

きな発行部数を得ます。たがいに努力を願

います。

日本浄土教物語（2）

浄土教の発達

——奈良から平安へ——

鈴木 成 元

（大正大学講師）

奈良時代に入ると寺院の建立は盛んになった。奈良七大寺をはじめとし、諸国に国分寺・国分尼寺ができ、寺の数は五四五に上ったという。仏教の興隆にもなって各種の写経所もおかれ、大規模な写経事業も行われた。一方、世界最古にして最初の大量印刷物である百万塔陀羅尼の印刷も行われ、僧侶は教化のかたわら道路・港湾・灌漑用水などの土木事業を起して民利の増進に努めるというように、仏教は現実的でもあった。

とりわけ光明皇后にまつわる美しい伝説はあまりにも多い。皇后の美貌と聰明さ、そして自ら病人の垢を落し、その背中の醜い腫物の膿を口に吸われた物語は貴い。やはり皇后は日本女性の美德をたたえた象徴である。皇后の来世思想は

西方浄土にあったらしい。『続日本紀』によると、皇后は天平宝字四年（762）に崩ぜられ、その七々日の忌を東大寺ならびに諸国の寺で行われた。その時国ごとに「阿弥陀浄土画像」を造らせ、僧尼には『称讃浄土経』を写させて礼拝供養させた。また一周忌には法華寺内の西南隅に阿弥陀院が造られ、以後毎年、忌日より一七日間、一〇人の僧を請じて阿弥陀仏を礼拝させた。諸国の国分尼寺には丈六の弥陀像一軀を造らせた。死後における浄土思想がいかにつよいかわかるであろう。

一方『正倉院文書』をみると、西方浄土に関する経籍類の多いことがわかる。『阿弥陀経』『観経』『無量寿経』『安楽集』『往生礼讃』などが夥しく写されている。善導の著作

は五部九卷をはじめほとんど伝わり、その他浄土教に関する註疏も多い。浄土教の進展してゆく過程が察せられる。

やがてこれらの思想は芸術的な表現へと移り、「当麻曼荼羅」の出現を見るのである。当麻曼荼羅は、天平宝字七年（735）、中将姫の本願で、一夜のうちに化身の一比丘尼が蓮の糸で織り上げたという。このロマンな伝説は事実ではないが、おそくとも、平安時代の初めに作られた綴織の曼荼羅であることはいうまでもない。『観経』の所説にもとづき、本尊阿弥陀の座する中台をめぐって、左に序分十一段、右には日想観以下十三観、下には上品上生より下品下生に至る九品の来迎が添えてある。映画でも演劇でも同じことであるが、不良少年とかギャングなどを演ずることはそう難かしいことではない。しかし大学教授とか良家の旦那とかの品の良い役をこなす役者は極めて少ない。絵画でもそうである。地獄の表現は易しいが極楽の表現は難しい。それをこれだけ巧みに描き上げたものは少ない。弥陀三尊を中心に多くの菩薩達が左右対称に並んで往生人を迎える構図は、『観経』の意をズバリと捕え、慈悲に満ちた優雅さを強調している。浄土教の隆盛にもなあってこの曼荼羅は多く模写され、全国に普及して信仰の対象となっていた。それは当然のことといえる。

平安時代に入ると浄土教の発達は著しいものがある。一般

には浄土教の根源をここに求めている。そのぐらいいめざましいものがあつた。空海は『性霊集』の「願文」の中で、亡親が速かに九品の正路を開いて極楽にゆき、蓮台の上に生れてくれといっている。真言宗でもこの思想は根強いことがわかるが、浄土教の発達に一層の拍車をかけたのは比叡山である。最澄は早く四種三昧の法を創めた。この中の常行三昧は般舟三昧であるが、これこそ日本念仏思想の一つの出発点である。常行三昧は九〇日をかぎって行われるもので本尊阿弥陀仏のまわりを行通しながら心に弥陀を念じて、念仏を口称するものである。最澄はこのため常行三昧堂を建てる計画をしたが、完成しないうちに入寂した。三昧堂が建てられたの



(当麻曼荼羅)

は三世座主円仁のときである。

円仁はシナに渡り、常行三昧の法も学んできて弟子に授け、仁寿元年（八五二）はじめてこれを行った。しかし最澄のものとは少し変り引声^{いんせい}阿弥陀経とか引声念仏という形で行われるようになった。つまり曲調の上にのせて、阿弥陀経なり念仏なりを称えてゆく、しかも音の高低、遅速などを組み合わせたもので音楽的な性格をもつものであった。これが日本における念仏のおこりで、全国に広まっていったのである。

常行三昧堂は寺院ばかりでなく、在家においても作られたようである。清少納言は『枕草子』の中で、自分でお堂を作って三昧を行ふことができる人はうらやましいと書いている。彼女の周囲にいる貴族の中には自分の三昧堂を持っている人々がいたことであろう、彼女もそれを欲したのである。彼女は寺を愉快な遊楽の場所としてこのんだ。説教についで感想を『枕草子』で「説教師は顔よき、つとまもらえたるこそ、そのとく事のおとさも覚ゆれ」といつている。つまり、説教師は顔のきれいな者がよい。それをじっと見守っていると、説くところの尊さも感じられるという。説教を聞くにも信仰から聞くのではなく、あたかも面白半分聞くかのである。とんでもない女と思われるかもしれないが、これは彼女の一面であり、当時の世相をよく物語っている。

るものである。

当時の仏教は時代の先端を行く学問であったばかりでなく、仏教の中には全てのものが包括されていたのである。何処の国、如何なる民族でも同じであるが、最初は祭政一致である。日本でもそうであった。しかし一応垂仁天皇の御代に分離したことになる。伊勢神宮は分離されても全部のものが分離されたわけではない。仏教の中に政治は入っていたのである。これは政治ばかりではない。学問にしても、経済にしても、法律・文学・芸術・芸能まで、全て仏教とともにあったわけである。分離以前の状態であるから、信仰を求めるためにばかり寺にかようと思つたら大きな間違いを引きおこすことになる。寺に集るのは信仰とは別に絵画・彫刻などの芸術を求める人々、音楽などの芸能を求める人々など千差万別である。清少納言が他の貴族と同様浄土の極楽を求めたことはうなずけるけれども、僧侶の説く説話文学や声明にひかれたことも事実であろう。

それはともかくこの時代、藤原良相・藤原保則・三善清行など、四十五人の極楽願生者の伝を集めた『日本往生極楽記』が慶滋保胤^{よししけやすたね}によって書かれた。彼は天文・暦数を伝える賀茂家の二男として生れたが、少年のころから極楽を慕い、阿弥陀仏を念じていた。四十歳以後になるといよいよはげしくな



り、行住坐臥に称念し、相好を観じるようになり、寛和二年（癸亥）に出家して、寂心といった。

うき世をはそむかはけふもそむきなむ

あすも有とはたのむへき身か

（拾遺集）

は有名である。すぐれた文章としてよく知られている、『池亭記』

をみると、自分の屋敷の中にお堂を作って念仏をしていたことがわかる。このような保胤であるから特別といってしまうまでもであるが、一般在家の上流階級などではこういう常行三昧が行われていたと考えられる。そして西方往生を願ったのである。

在家でさえそうであるから僧侶においてはなおさらである。延喜十八年（九二八）・相応和尚、延長五年（九三三）の増命は

西方に礼拝し阿弥陀仏を念じて息が絶えたと扶桑略記は伝え、『往生極楽記』には延昌の様子を記している。延昌は毎月十五日諸僧を招いて『弥陀讃』を唱え、浄土の因縁を対論させた。常にいうことに、「自分の死ぬ前三七日の間不断念仏をしようと思う。その結願の日に自分は死ぬ」と。果して彼は十二月二十四日から不断念仏をはじめ、明年の正月十五日、枕もとに弥陀・尊勝の両像を安置し、仏の手から自分の手に糸を引き死んでいった。永観三年（癸亥）良源も念仏しながら息をひきとった。

こうした例をみても明らかのように、平安時代に入ると浄土教は急激に発展し、貴族や僧侶間に根強い思想を植えつけるようになった。その事実が学問・芸術の面にも大きな花を咲かせる結果になるのである。

内野博士
還暦記念

東洋学論集

定価 一五〇〇 送料一〇〇

莊子における死生観

東北大 金谷 治

太平経と仏教

大正大 吉岡 義豊

「孔丘秘経」考

大正大 安居 香山

外二十四氏執筆

○本会で取り継ぎます

喜劇・悲劇

わがクラスの男子はどう

してこいやらしいのか

ホントにまったく、わがクラスの男子
ときたら、ツメのアカほども、ほめると
ころがない。

第一に不親切だ。女子が忘れ物をした
って絶対に貸してくれない。そのくせ自
分が忘れたときには、平気で借りて、こ
わして返すのがオチだ。自分なんか、宿
題、全然してこないで、十分の休みに人
のをうつすくせに、ちがってりや、文句
をつけてくる。

それに行儀の悪さときたらない。給食
なんか、人の物まで手を出して、ガツツ
イテ、ミルクをこぼしても、ふこうとし
ないから、五時間目の教室はブタ小屋な
みだ。

イスがあるのに机の上にすわったり、
服の一番上のボタンをはずして、手をボ
ケットにつっこんで、音の狂った口笛ふ

いて、ゴリラみたいな歩き方をして、女
の子の前を通って行く。

体育のあとは、まっ黒な足で教室には
いつて来るくせに、鏡なんか出して、ク
リームをぬってるヤツもいる。女子が、
ちょっと、オシャレの話をしていると、す
ぐガーガービービー、いうくせに。

それに、おマセだ。男子ばかりのと
ころへ女子が、何か取りに行くと、キャ
ーキャーと女の子にも出ないような、へ
んな声を出す。

エッチで、乱暴で、イタズラで、図々
しくて、不潔で、からいばりしている男
子どもよ、女子だって、ひっぱたかれて
ばかりいるんじゃないぞ。それでなくて
も、レディファーストの時代だ。少しは
親切にしてくれないと、女子が団結して、
立ちあがる日も近いんだぞ。

(挿) 初恵 中学生 十四才

こんな投稿が「暮しの手帖」の『だれかに
一言』という欄に掲載されていた。この欄
は、編集部の言に「相手はだれとはかぎりま
せん。かねて一言したいモヤモヤを、具体的

にお書き下さい」とあります。このモヤモヤ
を持った投書者は、某県の十四才の女子中学
生でありました。文は実に生き生きとした、
生活感情と結び付いた、巧みな筆のはこび
で、大変読ませる文章でした。にきび顔の女
子中学生の淡い恋心と読むのは、ヒガミでし
ょうか。現代っ子の最近の女子中学生がこん
な風に教室内で生活しているでしょうか。私
は某中学校で教壇に立っているが、女王様の
如き女生徒の叱声一つで、か弱き男生徒はシ
ュンとしている。そんな様子をしばしば私は
目撃しているのだが……。

或る日、男子生徒だけの教室で、前掲の文
を読んできかせたところ、けんけんごうごう
の意見百出。結論するところは「そんな男生
徒の通用する所で、一日でも良いから勉強し
て見たい」との事だった。何んたることよ、
同じ男性たる私も、思い当たることが多く、
しばしシュンとした一幕。

次いで、女生徒ばかりの時にも同様な試
み。なんと、「そうです。そうですその通り
です」との声ばかり。

皆様はどちらに軍配をあげられますか。

編集後記

▽極寒の二月に入りました
二月は流感の多い月ですが、
読者の皆様方にも御自
愛下さい。

▽浄土門主岸信宏宛下には
益々御元気で宗門の発展の
為に御活躍中ですが、本年
は喜寿をお迎えになられる
そうで、宗門でも祝賀会を
計画中とか。浄土宗も新内
局と新宗会が成立したばか
りの大事な時期故、御門主
も尚一層御健康に留意され
御活躍を下さいます様、お
願い申し上げます。

▽二月はねはんの月ですの
で大正大学助教授宮林昭彦
先生に「ねはん」について
書いて頂きました。

▽先月にひきつづいて掲載
させて頂いている座談会
「現代社会の動きと宗教の
役割」はすこし大きな問題
かと思われませんが、これか
らこの様な座談会は度々

計画し、出るだけ大勢の
先生方と大いに語っていた
だき、そこから、現代にマ
ッチした新しい浄土のビジ
ョンが出てくれば収穫と考
えていきます。読者の皆様方
も、これからの浄土宗のビ
ジョンについて大いにお考
えになって御意見をとしど
し御寄稿下さい。

▽先般来、御病気で御静養
中であつた、浄土同人であ
る大正大学教授、竹中信常
博士は、もう御元氣になら
れた御様子、今後とも御健
康には十分御留意下さい。

▽浄土の編集人であり、大
正大学の学生課長である安
居香山氏は、大学の学期末
試験と入学試験の準備に御
多忙ですが、安居氏は、本
年は女子学生の入学を増や
したいと語っておられました。
た。

▽読者の皆様に誌上よりお
わび申し上げます。鑽仰会
の浄土宝暦、初めての試み

でしたが、大変評判がよく
昨年末品切れとなつてしま
い、多方面に御迷惑をおか
けてしまいました。心か
らおわび申し上げます。

▽雑誌「浄土」も愛読者の
皆様の御協力でどうやら順
調に発行を重ねております
が、会費未納の方が大分お
られますので、どうぞ未納
の方はお早めに御納入下さ
る様お願い申し上げます。
なお浄土への御希望御注文
等、どしどし編集部までお
よせ下さい。

▽本会も創立されてより、
はや今年は満三十年を迎え
ました。真野正順博士をは
じめ中村弁康、佐藤賢順の
両先生など、いまは往生浄
土の素懐をとげられ、編集
子も、三十巻を前にしてく
れた感慨一入なものがあ
ります。今年は、因縁深き浄
土の諸先生にも還来して頂
き、三十周年の記念会をし
たいものと思つています。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和四十年一月廿五日 印刷

昭和四十年二月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

電話東京二六二局五九四番
横濱東京八二一八七番

大正大学

学長 佐藤 密雄 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色**
1. 西と東，右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って，穏健中正，操守高き学生を育成する事を目標とし，教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は，入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか，研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部＝国文学，英文学，史学，西洋哲学，宗教学
中国学，社会学，社会事業の8専攻

仏教学部＝仏教学，梵文学，天台学，真言学，浄土学の5専攻

大学院＝修士コース，博士コース（仏教学，宗教学，国文学）

昭和40年度1年の募集人員は200名，男女共学試験科目は，国語（漢文をふくむ）社会，外国語（英，独，仏のうち一つ）

試験期日

第1次	2月26日・27日（金・土）	詳細は入学案内
第2次	3月26日・27日（金・土）	を参照のこと

梵鐘のトップメーカー
日本一の技術と伝統

梵鐘その他銅合金
記念・贈答用美術鋳物調整承
池上本門寺大鐘 香取正彦作

老子の 名鐘



昭和三十九年九月 謹鑄
口径一・六メートル重量七トン

文紋彫刻技術指導 香取正彦先生
梵鐘界の権威

音響指導 青木一郎先生
理学博士

鋳物師 老子次右工門

株式会社 老子製作所

本社 富山県高岡市横田511 電話② 0258
大阪連絡所 大阪市西区南堀江2-11 電話 (531) 4075
大阪支店は電電公社の接続のため上記に連絡所を開設しました御利用願います